様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月　 ３ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８０８９２

研究課題名（和文）大学生の発達における飛躍的移行を支える発達認識の深化と発達教育のあり方

研究課題名（英文）Enrichment of the perception of human development and education of development

研究代表者
西垣　順子（NISHIGAKI, Junko）

大阪市立大学・大学教育研究センター・准教授

研究者番号：８０３４５７６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）： 10歳代終盤から20歳代にかけての発達に関連して、その特徴の抽出と教育のあり方の検討を行った。この時期の青年は、新しい発達の階層への移行期にあり、移行に際しては交流関係の変化とそれに伴う交流の手段の変化が重要との指摘が導かれた。
また発達について学ぶことで、自らと仲間の発達を守る行動がとれるようになり、それがさらに次の階層への移行の準備ともなることも示唆された。このような認識のもと、専門教育と教養教育をフィールドとした教授法開発を行った。

研究成果の概要（英文）： Important points of developmental process of college students were extracted, and education according to those points was proposed and discussed. Young adults from the ending point of teenager to the beginning of twenties are in the finishing period of transition to the new developmental hierarchy. The change of the way of communication, which is supported by the enlargement of their association, is important.
Learning about human development helps young people to act to protect their own development as well as their friends' development. Based on this perception, pedagogy of developmental learning both in general education curricular and in major curricular was developed.

研究分野： 発達心理学

キーワード： 大学生の発達　発達教育　学習についての認識　成人への移行　発達保障

１．研究開始当初の背景

大学教育は職業準備のためのみに存在するのではなく、青年の人間発達において重要な役割を果たすはずだという主張に、多くの人が同意すると思う。他方で、具体的にはどのように、大学教育が人間発達に寄与しうるのかについて、発達心理学の観点からの知見は少ない。特に、課外活動や恋愛などの人間関係による成長発達ではなく、学ぶことの発達上の意義については、それが明確に論じられているとは言い難い。

そこで本研究では、大学で学ぶことで学生が自分自身の発達についての認識を深めていくことができ、そのことによって発達上の飛躍的移行を成し遂げることができるのではないかと考えた。また、学生が発達について知るための発達教育にも、注目をすることにした。

２．研究の目的

本研究は主に、次の 3 つの目的のもとに進められた。

(1) 第 1 の目的は、大学生の時期（10 代終盤から 20 歳代前半）の発達的プロセスを理論的に整理することである。

本研究は「可逆操作の高次化における階層―段階理論」（以下、階層―段階理論）と呼ばれる発達理論をベースに進められた。階層―段階理論は、田中昌人という発達研究者を中心に、1960 年代から検討が進められた発達理論である。認知発達と人格発達を統合的にとらえた理論であるという、他の発達理論にはない強みを持つが、14 歳以降の発達についての記述は詳細ではない。本研究はこの部分を補い、理論を精緻化することをめざした。

(2) 第 2 の目的は、発達についての教育である「発達教育」の概念整理と実践の開発を行うことである。発達や発達心理学は多くの大学で教えられている。だが実際には、子ども時代の各年齢の特徴などを理解することが中心で、「発達」についての教育がどこまで行われているのかは不明である。実際のところ、育児書の情報に振り回される母親の苦悩が、メディアなどで報じられることもあり、発達についての一般的理解は十分とは言い難いと思われる。発達について学ぶとはどういうことなのか、どういう方法がありうるのかを、本研究では検討する。

(3) 第 3 の目的は、学生の「学ぶこと」についての認識を深めるための大学教育実践を開発しつつ、学ぶことや研究することを大学生がどのように認識しているかを調査することである。

大学入学前には知識習得的学習を中心とする学びを行っていた学生は、入学後に、知識生産的学習中心の学びに出会うことになる。このことで自らの学習が相対化され、学ぶことについての認識が深まると考えられる。他方、そのような変化を促す教育的支援も重要になる。

学びについての認識の相対化は、自らの発達を認識すること（発達認識を深めること）につながると考えられることから、この第 3 の目的も本研究の中に加えられることとなった。

３．研究の方法

前節で述べた３つの目的それぞれについて、採用した研究方法は次のとおりである。

（1）10 代終盤から 20 歳代前半の発達プロセスの理論的検討に関連しては、階層-段階理論に関連する文献を整理・検討するという方法をとった。階層-段階理論に関しては、10 歳代後半以降の記述がまとまっておらず、多くの文献中に断片的に記述されている状態であった。そこでそれらの文献に記述されている事柄を取り出し、整理することで、10 代から 20 歳代の発達的特徴を整理した。またそれらと併せて、目的（2）にもつながる視点として「20 歳前後の青年が人間発達について何を学ぶ必要があるのか」という問題についても、理論の整理を行った。

(2) 発達教育に関しては、人間発達に関する知見を職業に生かすことが多い対人援助職養成教育の専門科目としての教育実践の研究と、多様なキャリア志向をもつ学生に対する教養教育としての発達教育の実践の検討を行った。

（3）目的の３つめの「学ぶこと」に関する認識については、興味のあるテーマを研究課題へと深めていくための教育指導法（教授法）開発と、「学ぶ」と「研究する」という言葉について大学生が持っているイメージに関する調査を行った。

４．研究成果

3 つの目的に関連して、次のような成果を得ることができた。

(1) 10 歳代終盤から 20 歳代前半の発達的特徴について

発達上、3 つのポイントがあると言える。１つはこの時期が、発達上の異なる階層間の移行を完成させる時期であることである。新しい階層に至った青年は、既存の概念や法則を相対化して考えることができるようになる。

2 つ目は、この階層間移行のためには、14 歳前後に誕生する「新しい発達の力」が健やかに育つ必要があるということである。「新しい発達の力」は、既存の概念や法則を相対化して考えることのできる抽象的思考力のもとになる力であり、この力が育つことで青年は、物事の表面的な現象の奥に何があるかを探っていくことができ、仲間たちと連帯・協力して新しい価値を作って行くことができる。またこういう観点からも、14 歳以降の中学・高校・大学の接続は重要な課題になる。

3 つ目は、大学入学によって、交流・関係性のあり方が「同質な他者と非対等で異質な他者との関係」から「対等で異質な他者との

関係」へと広がっていくことである。関係性のあり方が広がることで、交流の手段の幅が広がり（公共圏コミュニケーションの獲得など）、その結果として階層間の移行がより確実になる。ただし、大学生がおかれる環境によっては、この関係性の変化が十分に生じていないことを懸念させるデータもある。

また、抽象的思考力の発達等の認知発達上の変化に加えて、人格発達面の変化として「第 2 の自己客観視」と呼ばれる、社会や歴史の中でどう生きるかを模索する自己客観視が重要になる。だが現在の日本の社会では、青年たちが日々の生活や学習と、社会や歴史というマクロな次元を連続させて理解するのが難しいのではないかという指摘がある。このような懸念を踏まえつつ、青年自身が語る言葉を中心にした教育内容の設定などが必要ではないかという問題提起がなされた。

（2）20 歳前後の青年が発達について学ぶとはどういうことか（発達教育が目ざすもの）

関連する文献等を整理して、大学生の時期の発達的特徴を分析した結果、この時期の青年は人間の発達に関連して、次の３つを学ぶべきだとの結論が導かれた。1 つは発達に関する概念的な理解である。２つめは、人間発達の特徴である。３つめは、人間の発達とその権利の歴史的変遷である。

一般的な発達心理学当の授業では、２つめの問題が中心に扱われる。しかし、これら３つを学ぶことで青年たちは、自分自身と自分の仲間たちの発達を守るために行動することができるようになると考えられる。

（3）発達教育の実践

① 専門教育

1950 年代後半以降の発達保障論の研究運動の歴史的分析を通じて、発達を研究する上で不可欠な基本概念が提起されてきたことの重要性が再認識された。対人援助職の現場では、様々に新しい課題に直面する必要があり、それが可能になるような「発達についての知」を有する必要がある。その重要な要素として、このようなカギとなる基本概念の検討が含まれると考えた。そしてこのことを念頭に、教育・支援現場での介入点の探索を念頭に置いた演習を行った。

② 教養教育

教養教育においては、学生が一般的に持っている発達についてのイメージ（多くの場合、能力の増強とほぼ同義であり、20 歳前後でピークを迎えて後は衰えるというイメージ）を揺さぶり、相対化させることが主要な目的になると考えた。

そこで、『夜明け前の子どもたち』というドキュメンタリー映画を使って、「発達しないと考えられていた子どもたちの発達する姿」と「それを支える支援者の苦悩」及び「発達を可能にしていく社会のあり方の模索」について、受講生が考えるための授業を設計、実践した。映画『夜明け前の子どもたち』の効果は、重い障がいのある子どもの発達を理解する上では有効であるが、社会のあり方等にまで学生の思考を広げるには、授業実践上の工夫が必要なことなどが明らかになった。

（4）学ぶことについての認識

① 教授法開発

Twitter と Google アラートを活用して、受講生の「興味あるテーマ」を研究課題に深めていくための教授法を開発した。学生は Google アラートが配信する記事を閲覧しながら、キーワードの追加・変更を行いつつ、情報を収集した。教員から指定される文献も読んだうえで、最終レポートを執筆した。学生が指定していたキーワードやツイート数の推移から、学生たちは断続的に情報収集を続け、興味関心を広げたり深めたりしていた様子がうかがえた。

また、学生が多様な種類の情報を活用できるため、図書館情報とスマートフォンを併用した文献の探し方についてのポイントの整理も行った。

② 学びと研究に関する認識

3 つの大学の学生を対象に、学ぶことと研究することについてのイメージについて調査を行った。上述の大学生の発達上の特徴についての説明をすると、抽象的思考力の発達などは選抜性の高い特定の大学の学生の話ではないかとの指摘を受けることが少なからずある。だが調査をしてみると、「学ぶ」とはどういうことかについての認識には、大学による違いは確認できなかった。他方で研究については、研究をどの程度自分にとって身近で大切なものと考えるかに大学間の差があった。

（5）今後の課題

大学生の発達について、特に大学において学ぶこととの関連を中心に理解を深めていく上で、今後の研究課題となることを次の 3 点に整理した。1 つは、中等教育を対象とした青年期支援の取り組みと連携した調査の必要性である。2 つめは、青年たち当事者の声を掘り起こして、彼女・彼自身が自らの発達する権利とどう向き合っているのかを明らかにすることである。3 つめは、大学生の発達をめぐる研究上の知見、当事者の意見、社会の問題について、青年・学生・市民の間で知見を共有していく仕組みの構築である。

青年期は、自分自身と仲間の発達を、自分で守るために行動することができるようになっていく時期である。自分の発達を守るということは、皆の発達を守るということと究極的には同義である。そういう観点から考えて、青年の発達上の特徴とニーズを、青年自身と支援者、および市民全体の共有知としていくことは、発達心理学やその他関連する学

問の課題であると言えよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）
田澤実　2016　「図書館情報とスマートフォンを併用した文献の探し方」,『法政大学キャリアデザイン学部紀要』, 13, pp.227-251.

西垣順子　2015　「1960-70 年代の発達保障運動と療育実践の記録映画を使った発達教育の可能性と今後の研究課題」,『人間発達研究所紀要』, 28, pp.16-28.【査読有】

〔学会発表〕（計 10 件）
(1) 西垣順子　2016　「大学生による『学ぶこと』と『研究すること』の喩え」, 教育心理学会第 58 回総会, かがわ国際会議場, 2016.10. 16

(2) Junko Nishigaki 2016 New Approaches to Adolescent Development: Discussion on Tanaka's Theory of Hierarchies and Stages on the Reversible Operations in Human Development, International Congress of Psychology, Yokohama(JAPAN), 2016.07.26

(3) Junko Nishigaki 2015 Evaluation of a General Education Course at a Japanese University: Efforts to Deepen Student Understanding of Human Development, Teaching Institute (Society for Research of Child Development), Philadelphia (USA), 2015.03.15

(4) 田澤実　2015　「大学１年生における時間的展望の構造―写真投影法を用いた実態把握と働きかけ」, 教育心理学会第 56 回総会, 神戸国際会議場, 2015.11.07

(5) 中村隆一　2014　「『発達支援』で心理専門職は何ができるのか」, 心理科学研究会 2015 年春の研究集会, おおとり壮(静岡県), 2015.04. 18

〔図書〕（計２件）
(1) 西垣順子　2016　「発達を識っていくことの意味と意義」　中村隆一・渡部昭男（編）『人間発達研究の創出』第 10 章, pp.146157, 群青社

(2) 西垣順子 2016 「青年期教育としての大学教育を拓くための研究課題―発達心理学の観点からノンエリート青年の発達保障と大学教育を考える」, 大学評価学会（編）『大学評価と「青年の発達保障」』第１章, pp.9-28, 晃洋書房

〔その他〕（計２件）
(1) 西垣順子　「あとがき」, 大学評価学会（編）『大学評価と「青年の発達保障」』, pp.101-104, 晃洋書房

(2) 西垣順子（編）　研究成果報告書「大学生の発達における飛躍的移行を支える発達認識の深化と発達教育のあり方」（2017 年 3 月）

６．研究組織
(1)研究代表者
西垣　順子（NISHIGAKI, Junko）
大阪市立大学・大学教育研究センター・准教授　　研究者番号：80345769

(2)研究分担者
田澤　実（TAZAWA, Minoru）
法政大学・キャリアデザイン学部・准教授
研究者番号：50459963

中村隆一（Nakamura, Ryuichi）
立命館大学・応用人間学研究科・教授
研究者番号：00469165